

# インクルーシブ社会を目指して



細川 佳代子  
 (元首相夫人/NPO 法人 勇  
 気の翼 インクルーシブ法  
 2015 理事長/認定NPO 理  
 人 スペシャルオリンピッ  
 ス日本名譽会長/NPO 法  
 人日本フロンティアホッケー連  
 理 理事長)

「今日はゴールではございません。スタートです！」二〇〇五年スベシャルオリ  
 ンピックス(以下SO) 冬季世界大会・長  
 野の閉会式でのご挨拶です。「本当の成果  
 が問われるのは一〇年後、二〇一五年まで  
 に、障がいの有無などに関係なく、全ての  
 人が地域社会で生き活きと、助け合い支え  
 合って暮らしている、そんな社会が実現し  
 て初めて、大会が成功だったと言える」と  
 申しました。誰もがかけがえのない大切な  
 存在であることに気付き、障がいを「個性」  
 としてとらえるような意識の変革が  
 あってこそ、この「真の成功」が実現でき  
 ると考えています。

ではどうすれば人の意識を変えることが  
 できるでしょうか？ 障がいそのものにつ  
 いての教育や知識の習得も大切だと思いま  
 すが、長年のSOの活動を通して、私が実  
 感しているのは、障がいのある方たちと関  
 わりをもつこと。共に汗を流したり、言葉

自身にも自信をもち、必要とする人に自然  
 に手を差し伸べる勇気を身に付けてくれた  
 結果だと嬉しくなりました。

## II ぶれジョブによる交流

「ぶれジョブ」とは、倉敷の中学校の特  
 別支援学級の先生が発案した取組で、障が  
 いがあったり、他者と意思疎通が図りにく  
 いなどの支援を必要とする子どもたちが、  
 週一回一時間のお仕事体験を通じて、地域  
 社会の一員として自信をもって暮らすこと  
 を目指すボランティアプログラムです。

商店やスーパー、会社など受入れ事業所  
 には、週一時間のお仕事を用意していただ  
 き、地元のボランティア(ジョブサポー  
 ター)がチャレンジする子どもと一緒に仕  
 事場に行って、付き添ってサポートをし  
 ます。

週に一回一時間という設定は、受入れ事  
 業所やボランティアにとつて無理なく始め  
 られ、関わるうちに相互理解が深まり、続  
 けるうちに学び合って、温かい関係が生ま  
 れる、まさに地域の「絆づくり」プログラ  
 ムと言えるでしょう。

チャレンジする子どもたちは、ぶれジョ  
 ブを通じて技能を身に付け、人から感謝さ  
 れることに喜びを感じたり、自分に自信を

を交わしたり、一緒に楽しい時間を過ごす  
 交流体験を続け、「友達」になることこそ  
 が、相互理解への一番の近道だということ  
 です。ここでは、私が今取り組んでいる、交  
 流の実践例についてご紹介いたします。

## I フロアホッケー(以下FH)による交流

FHとは、直径二〇cmの穴のあいたパツ  
 クをスティックで操り、相手側のゴールに  
 入れる競技で、学校の体育館や公民館など  
 で誰でも気軽に楽しめるスポーツです。も  
 ととはSO独自の競技で、障がい者ス  
 ポーツとして発展してきましたが、現在は  
 年齢・性別・障がいの有無などにかかわら  
 ず、体力や技能レベルに応じて誰もが一緒  
 に楽しめる「ユニバーサルスポーツ」とし  
 て、普及に力を入れています。ナンバーク  
 ンを競うほかのスポーツとの決定的な違い  
 は、老若男女・障がいの有無に関係ない、  
 実に多種多様なチームが一緒に競技を楽し

もつようになってきたりと、みるみる成長して  
 いきます。受け入れる事業所、サポートす  
 るボランティアも、会うたびに成長する姿  
 や元気な挨拶、輝く笑顔を見るうちに、自  
 然に自分も幸せな気持ちになって、子ども  
 たちと過ごす一時間がかけがえのない時間  
 になっていくようです。

障がいのある人を見て見ぬふりをしたり、  
 腫れものに触るようになっていたりするとき  
 は、学校と自宅ではほとんどの時間を過ごす  
 子どもが少なくないと聞きます。地域社会  
 に暮らしながら、地域社会の人と交流する  
 機会はほとんどなかったりするのです。

ぶれジョブが始まり、子どもたちが頑張  
 る姿を当たり前に見かけるようになって、  
 取り巻く街の人が変わっていきます。自然  
 な声掛けが始まったり、障がいのある方々  
 を当たり前前受け入れる地域社会ができて、  
 街の景色が変わります。優しさと思いやり  
 がいっぱい溢れる街が広がることで、社会は変  
 えられると思うのです。

## III 障がいがある方との交流が教えるもの

残念ながら日本では「障がいのある方々  
 と接しなことがない」という方がほとんど  
 だと思います。こちらが意識して働きかけ  
 ない限り、そういったチャンスがないので

めることです。全国大会にも、特別支援学  
 級と通常の学級の子どもの合同チーム、S  
 Oアスリートとコーチのチーム、特例子会  
 社の障がいのある社員と障がいのない社員  
 のチーム、年齢差が六〇歳もあるメンバー  
 で結成したチーム等々が参加して、ほかの  
 競技大会では考えられないユニークな試合  
 が繰り広げられます。私も毎年一選手とし  
 て出場し、お互いを認め、称え合う、温かな  
 笑顔溢れる大会から元氣と勇気をもらって  
 います。

長野県のある中学校では、近隣の知的障  
 がい者の施設利用者とフロアホッケーによ  
 る交流授業を継続的に実施してくださいま  
 した。結果として、それまで横行していた  
 いじめがなくなり、学力もアップしたと聞  
 きました。障がいのある方々との交流の中  
 で、生徒たちは、人には得意・不得意、違  
 いはあるけれど、それぞれ皆が大切である  
 こと、他者も自分も認め合うことで、自分

す。助けや支えを必要とする人たちに接し、  
 手を差し伸べることで、実は私たちも助け  
 られ、成長し、豊かで温かな気持ちを感じ  
 ることができます。

精いっぱい生きることに。誰もが世界で  
 たった一つのかげがえのない大切な存在で  
 あること。そこにいるありのままの姿自体  
 がとても尊いこと……私にたくさんのこと  
 を教えてくれたのは、知的障がいのある  
 方々です。競争と排除を繰り返してきた社  
 会は、やり遂げた充実感や心の豊かさ  
 といった人間が一番大切にすべきものを切り  
 捨ててきたように思います。

「障がいのあるお友達がいいますか？」の  
 問いかけに「もちろんいます」と答える人  
 が過半数になったら、ダウン症や自閉症の  
 人たちが当たり前前にお仕事し、地域に溶け  
 込んだ温かなインクルーシブ社会ができ  
 ているはず……もうそこには「障がい者」  
 という言葉も必要ないことでしょう。

少しだけ勇気をもって、小さくてもいい  
 から何か行動してみませんか！ 小さな一  
 歩は必ず日本を変えていくと信じています。

(ほそかわ・かよこ)

※本稿においては、執筆者の意向により、「障がい」を  
 「障がひ」と表記した。